どもる君へ

いま伝えたいこと

伊藤伸二

特別寄稿
竹内敏晴

言葉がうまく出ないときって、あせる。悔しくて、恥ずかしくて、悲しくて泣きたくなることだってある。僕もそうだ。でも、この本は、「そんな自分もまるごと、世界にたった一人の、かけがえのない自分なんだよ」と教えてくれた。肩をそっと抱いてくれた。優しくて力強い手のひらの温もりが、確かに伝わった。

重松清

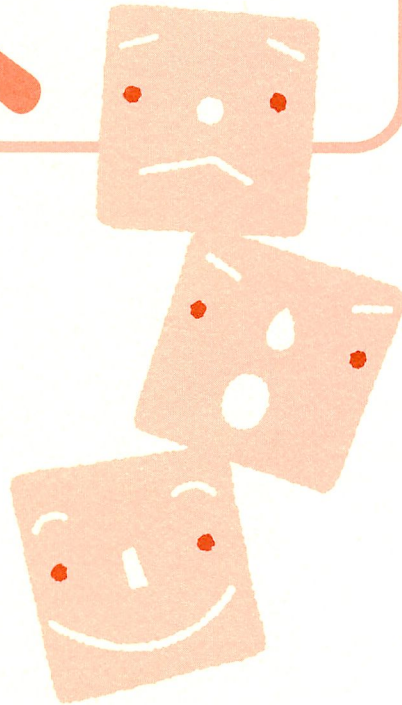
解放出版社

どもる君へ

いま伝えたいこと

伊藤伸二

特別寄稿
竹内敏晴



解放出版社

かつてのぼくとよく似たきみたちへ

重松 清　作家

吃音の少年を主人公にした『きよしこ』という小説を書いているとき、ぼくはずっと、あの頃のぼく自身と対話をつづけていました。

うまくしゃべれなかった。自分の気持ちをまっすぐに伝えられなかった。ひとと話したり、本を読んだりするのが、怖くてしかたなかった……。

あの頃のぼくは、ぽつりぽつりと（何度もつっかえながら）、つらかった思い出を語ってくれました。

でも、思い出話の最後に、あの頃のぼくは、ちょっとはにかみながら、付け加えたのです。

「うまくしゃべれなかったから……優しさが好きになれたかもしれない」

小説家のぼくは、その言葉に導かれるようにして、一冊の本を仕上げたのでした。

「優しいひと」になるのはすごく難しいし、すごく嘘っぽい。でも、「優しさが好きなひと」になるのは、できるかもしれない。言葉を口にするときにふと立ち止まること――それは、時としてナイフにもなってしまう言葉の怖さを噛みしめることでもある。そして逆に、言葉の持つ、悲しみを包み込む毛布のようなやわらかさを味わうことでもある。ぼくはそう信じて、そう願って、ときどき派

手につっかえながらも、誰かとつながるためにしゃべりつづけています。

もしかしたら、ふだん、自分の思うことをうまく伝えられずに、寂しい思いや悔しい思いをしている子もいるかもしれない。

でも、きみたちはひとりぼっちじゃない。

誰かとつながることができる。

つながり合うための言葉を、ひとよりもちょっと長めの助走をとって、ひとよりも少し不器用に、口にするきみたち——。

ぼくは、きみたちのことが好きです。

きみたちがしゃべる、すべての言葉が好きです。

そして、きみたちが、きみたち自身をもっと好きになってくれればいいな、と願っています。

重松清さんのプロフィール

1963年、岡山県生まれ。出版社勤務を経て執筆活動に入る。『ナイフ』で坪田譲治賞、『エイジ』で山本周五郎賞を受賞。2001年、『ビタミンF』で直木賞を受賞。どもる子を描いた『きよしこ』、どもる先生が主人公の『青い鳥』のほか、『流星ワゴン』『卒業』『その日のまえに』『きみの友だち』など多数。

はじめに

この本を手にとってくれた君、ありがとう。

君がこの本を手にとって読みはじめてくれたことが、ぼくはとてもうれしい。ぼくはこれまで10冊のどもりに関する本を書いているけれど、この本を書いているうちに、これが、ぼくが一番書きたかった本なんだと気がついたからだ。

どもりは、「そんなことぐらい気にしないで」とまわりから言われるほど単純で軽いことじゃない。

どもりは、とても人間らしい悩みで、古くは紀元前のギリシャの時代から、どもる人の悩みは記録として残っている。また何人もの小説家が自分のどもりについて書いている。大昔からたくさんの人がどもりに悩み、どもりを治そうと、努力してきたことも伝わっている。

どもりを研究する学問も、100年近い歴史があり、どもりを軽くしたり治そうと指導する臨床家といわれる人が世界中にたくさんいる。

君がどもることで困り、悩むのは当たり前のことなんだ。ぼくなんか21歳まですごく悩んでいたし、世界的に活躍した有名な人で、30歳や50歳まで悩んでいた人がいる。君がひとりで考えるほど簡単なことではない。

ぼくは深刻に悩んでいたとき、真剣にどもりに向き合ってこなか

った。21歳の夏に、初めて同じようにどもる人と出会ってから、勉強しはじめた。それから40年以上、どもりに取り組み、どもりについて考え続けてきた。

どもる人の会や研究会を作り、世界大会を初めて京都で開き、国際組織を作った。また、子どものための吃音親子サマーキャンプは今年で19年になる。世界のたくさんの人の体験が集まったことで、どもりとどのようにつきあえばいいか、ぼくなりに整理ができた。

だから今、ぼくが40年以上考え、実際に行動して、失敗したこと、とてもよかったことを、君のようにどもることで困ったり、悩んでいる人に伝えたかったんだ。

ぼくは今、たくさんの友だちがいて、自分の好きな仕事をし、充実した楽しい人生を送っている。今からみると、なぜあんなに悩んだのだろうと不思議なくらいだ。だけど、あんなに悩んだから今のぼくがある。悩んだことに意味があったんだ。

自分の人生はよかったと思えた瞬間に、過去の苦しかったことは、オセロゲームの黒がぱたぱたと白に変わるように、大切な意味のある経験に変わる。

ぼくが幸せに生きられるようになったのは、偶然の人との出会い、本やできごととの出会いのおかげだ。あのとき、あの出会いがなかったら、ぼくはまだ悩んでいたかもしれない。

人や本やできごととの出会いはとても大きな意味をもつ。だから今、君と出会えたことが、とてもうれしい。

誰も君の人生を代わりに生きてあげられない。君がどんなにつらくても、悩みの中から自分の力で自分の人生を見い出していくしかない。君とぼくとは違うけれど、ぼくの経験を伝えることで、少し、

君の役に立てそうな気がする。

子どもの頃に、どもりの正しい知識や考え方を教えてくれる人がいたら、違う学童期、思春期を送れただろうと思う。

悩み方に上手下手というのは変だけれど、ぼくは逃げてばかりいたから、損な悩み方をしてきたと思う。人間は悩みながら生きていく。悩んでもいいけれど、悩みが君にとって意味のあるものになるために、君とどもりについて一緒に考えたい。

ちょっと違った見方が君に広がればいいなあと思う。

たくさん失敗してきた先輩として、「こんなことには気をつけてね」と書きたかった。少しでも参考になればうれしい。

君にとって、内容が少し難しいところがあるかもしれない。そのときは、家族や先生に手伝ってもらって読み進めてほしい。この本がきっかけで、君がまわりの人にどもりについて話し、一緒に考えることができればいいね。

質問は、吃音親子サマーキャンプや電話相談でよく受けることだ。そのほか、ぼくの仲間の小学校のことばの教室の先生が教室で子どもから受ける質問を出してくれた。

君が質問したかったことがあればいいけどね。読んで疑問が出てきたら、メールでも手紙でも電話でもファクスでもいいから質問してほしい。

この本の後ろに、ぼくの住所や電話番号、メールアドレスを書いておくから、困ったときはいつでも連絡してほしい。

ちょっと先を歩いてきたどもる人間として、一緒に考えたい。ぼくはいつも君の味方だから。決してひとりで悩まないでね。

かつてのぼくとよく似たきみたちへ……重松 清　1

はじめに　3

Q1
この本を書いた伊藤さんは、どういう人ですか。
どんなどもりの悩みがあったのですか。 ▶ 9

Q2
「わたし」と言おうとするのに、「わわわわわたし」となったり、最近「・・・・わ」となって、ことばが出てこなかったりするんです。これって何ですか。 ▶ 13

Q3
どうして私はどもるようになったのですか。私が弱いからですか。 ▶ 15

Q4
私のようなしゃべり方をする人は、クラスで私しかいません。私だけですか。 ▶ 17

コラム　やっぱサマキャンの力はすごい　18

Q5
私は友だちと話しているときはあまりどもらないのに、本読みや発表だと声が出てこなくて、読み終わるのにすごく時間がかかります。みんなそうですか。 ▶ 20

Q6
私は話すとき、手を振ると声が出るので、手を振りながら話します。みんなが変だ変だと言います。これは、何ですか。 ▶ 22

Q7
どもりを治す方法に、どんなものがありますか。 ▶ 24

Q8
伊藤さんはどんな言語訓練をしてきたのですか。その方法は役に立ちましたか。 ▶ 28

Q9
どもりを治す指導を受けて、完全には治らないにしても、あまりどもらなくなったり、軽くなったりすることはありますか。少しでも改善されたほうがいいと思います。 ▶ 31

Q10
私はずっと、大きくなったら治ると言われてきて、治った人の話も聞きました。私のどもりは治りますか。 ▶ 34

Q11
どもりは自然に変わるというのはどういうことですか。 ▶ 37

Q12
どもりは氷山のようなものとは、どういうことですか。 ▶ 41

Q13
友だちが、どもっている私をからかいます。今はまだからかうぐらいだけど、いじめにあったらと思うと不安です。 ▶ 44

Q14
私には友だちがいません。友だちがほしいのですが、どうしたら友だちができますか。 ▶ 46

Q15
友だちが「なんで、こんな話し方なの。日本語しゃべってよ」とか言ってきます。どう説明したらいいですか。 ▶ 50

コラム ぼくは、吃音です 51

Q16
お母さんは、話すことに自信がないなら、ほかのことで自信をつけなさいと言います。何をしたら自信がつきますか。 ▶ 52

Q17
私がどもると、よく笑う人がいます。とても嫌なので、やめてほしいんですが、どうしたらいいですか。 ▶ 56

どもりカルタ 大阪スタタリングプロジェクト編 59

Q18
私がどもるのは気が弱いからですか。どもることくらいで、くよくよするなと言われます。悩むのも弱いからですか。 ▶ 61

Q19
学級代表になりそうです。うまくできそうにないので断るつもりですが、少し迷いもあります。どうしたらいいですか。 ▶ 64

Q20
なぜどもってはいけないのですか。なぜ治さないといけないのか疑問です。治したいと思ったときもあったけど、今はこれも自分の個性だと思うから、治したいと思いません。 ▶ 66

コラム なおしたいという気持ちから 67

Q21
ことばの教室はどんなところですか。 ▶ 69

Q22
このままどもりが治らなかったら、どんな仕事に就けますか。就いたらいいですか。 ▶ 71

君が幸せに生きるために 74

日本語でどもる人の、ことばのレッスン 84

特別寄稿 自分の話し方を見つけるために……竹内敏晴 85

おわりに 92

どもる人、親や教師が読んで役立つ本 95

おわりに

ぼくはこの本を、小学4年生から、中学生を頭において書いたが、少し難しかったかもしれない。だから、君が高校生になっても、大学生や社会人になっても、十分に役に立つと思う。

この本を読んで「そうだ、私も一緒だ」と思うことも、「うーん。ちょっと違うな」と思うところもあるかもしれない。難しいときも、疑問に思ったときも、家族や先生と一緒に読んだり、話し合ったりしてもらえればいいなあと思う。

この本を読んでくださるご家族や先生にもお願いしたい。

この本に、あたりさわりのないことは書かなかった。ぼくが経験して、大勢の子どもと出会って、考えたことを、本音のままに書いた。納得できないところもあるだろう。そのときは、「このように考えている人もいる。あなたはどう考える？」と私の本を材料に話し合っていただければうれしい。どもりほど、考え方が違い、取り組み方が違うものもめずらしいからだ。

アメリカの言語病理学を中心に、世界の吃音臨床は「どもりを治す、改善する」に依然としてこだわっている。それに対して、「どもりが治る・治すとは何か？」「どもりを改善することに中心をおいた子どもの支援で、本当に子どもは幸せに生きられるのか？」と疑問をもつ臨床家もいる。

ぼくは、ことばの教室を長年経験している人たちと、「治すこと

にこだわらない、どもる子どもへの支援プロジェクト」を作り、どもる子どもへの支援のあり方を探っている。

この仲間が質問を出し、ぼくが書いたものを東京で13人が集まって合宿して検討した。「私の担当している子はね」と、どもる子ども、どもりのことを話し合うのが大好きな人たちとした、明け方までの話し合いは、楽しい時間だった。1か月後、書き直したものを、合宿でまた話し合い、また書き直した。

特別寄稿の竹内敏晴さんに20年近く前に出会った。ことばについての考え方に共感し、多くのことを教えていただいた。竹内さんは、吃音親子サマーキャンプの劇の台本をつくり、演出指導をし、キャンプの活動をずっと支えてくださっている。

アメリカから紹介される言語訓練は、英語の発音のもので、そのまま、ぼくたちが使えるだろうかと疑問をもっていた。日本語でどもるぼくたちには、日本語のことばのレッスンがあるはずだとぼくは考えている。そこで、日常生活で、日本語を話すときに心がけることを竹内さんに書いていただいた。

作家の重松清さんが、原稿を読んで、この本へのうれしい推薦文と、どもる子どもへのメッセージを書いてくださった。

このように、この本に直接かかわり、支援、協力してくださった方々に心からお礼を申し上げます。

長年、一緒に活動する、どもる人のセルフヘルプグループ、NPO法人大阪スタタリングプロジェクトの仲間たち。18年間、吃音親子サマーキャンプに参加した大勢のどもる子どもとその保護者。手弁当で全国から集まり、キャンプを支えることばの教室の教師や、言語聴覚士などの大勢のスタッフ。この本は、この出会いがなけ

れば書くことができなかったものだ。

吃音研究、臨床心理学、カウンセリング、精神医学、学校心理学、文化人類学の専門家。詩人、作家、映画監督、劇作家、演出家、落語家、笑いの芸人、さまざまな分野の第一人者が、ぼくたちの活動に共感し、ワークショップや講演会に講師として来てくださった。さまざまな分野から、たくさんのことを学んだことが、ぼくたちの「吃音と共に生きる」を支えてくださっている。

これまでの大勢の方々のご指導に、あらためて深く感謝します。

最後に、この本の出版の意義を深く理解し、多くの制約の中で、出版してくださる解放出版社、ねばるぼくにつきあい、読みやすい本にしてくださった、編集部の尾上年秀さんに感謝します。